

じっきょう

地歴・公民科 資料 No. 82

もくじ
巻頭

特集

平成 29 年度用改訂教科書のご案内

図書紹介

高校世界史教科書と中世ヨーロッパ 時代区分・舞台設定・グローバルヒストリー ／小澤 実……………	1
高校生の主権者教育～どうすすめるか～ 1 生徒の意思決定を重視する主権者教育を ／杉浦 正和……………	9
2 生徒が“自ら学び”，考える主体”になっていけるような授業とは ／小泉 秀人……………	15
平成 29 年度用改訂教科書のご案内……………	20
新版世界史A新訂版／高校日本史A新訂版／世界史A新訂版 世界史B新訂版／最新現代社会新訂版／高校現代社会新訂版	
図書紹介……………	24

巻頭

高校世界史教科書と中世ヨーロッパ 時代区分・舞台設定・グローバルヒストリー

立教大学文学部 准教授

小澤 実

はじめに

「暗黒の中世」という言い方が、少なくとも歴史家やある種の教養人の世界から払拭されてかなりの時間が経過しました。とりわけ初期近代のプロテスタント系教会史家らにより否定的に扱われた「中間の時代」(medium aevum)である「中世」という時代は、そこに隣接する古代や近代と比較した場合、20世紀になってもなお初期近代以来の価値判断がつきまとう、ひどく扱いにくい時代でした。しかしながら、中世独自の価値を見出そうとする、ロマン主義の潮流の影響を受けた19世紀以来の学者共同体の努力は、20世紀後半に具体的な成果へとつながるようになりました。日本においても、

堀米庸三、木村尚三郎、阿部謹也、樺山紘一、池上俊一といった各世代を代表する中世研究者が、「暗黒の中世」を、「革新の12世紀」や「13世紀革命」といったキーワードで「明るい中世」へと衣替えさせてきました。彼らの中世観を後押ししたのは、ハスキンズやブロックらによる古典的な中世再評価研究であり、フランスのジョルジュ・デュビー、ジャック・ル・ゴフ、エマニュエル・ル・ロワ・ラデュリ、ジャン・クロード・シュミット、またイタリアのカルロ・ギンズブルクやロシアのアロン・グレーヴィチといった、フランスの歴史学雑誌アナルに集う中(近)世史家の研究成果の翻訳であり、1980年代に日本の歴史学を席卷した社会史ブームでした。かくして今や、少なくとも大学の授業で「暗黒の中世」が語られること

はまずありませんし、巻に見える一連の啓蒙書でも、興味本位のゾッキ本を除けば、いたずらに「中世」と「暗黒」を等式でつなぐものはほぼ痕跡を絶ったといえるのではないのでしょうか。

ひるがえって、高校世界史教科書の現状はどうでしょうか。たしかに社会史やジェンダー研究の成果を反映している記述も増えてきましたし、一方的に「暗黒の中世」に閉じ込める表現を認めることはなくなりました。しかしなお高校世界史教科書に収められた中世ヨーロッパ該当部分の骨子は、昔ながらの姿を変えていないように思えます。つまり、西ローマ帝国の崩壊→カール大帝の戴冠→グレゴリウス改革→封建社会の成立→都市と商業の成長→黒死病→百年戦争の終結とビザンツ帝国（東ローマ帝国）の崩壊による中世の終焉というストーリーです。この物語の起点は476年であり終点は1453年です。四半世紀前、私自身もそう習いましたし、いまでも、高等学校で世界史を履修した多くの学生はそのような認識で大学に入ってくるように感じています。

たしかに、以上でみた中世1000年の歴史はわかりやすい図式であるといえます。地中海世界を覆い尽くしていたローマ人の文明世界が、北方出自のゲルマン人と中東発祥のキリスト教によって中世世界に変質し、人文主義・大航海・宗教改革によって近代へと飛躍する。話のテンポは良いし、相前後する古代世界や近代世界とのコントラストもはっきりしており、ひとつの歴史物語としては受け入れやすいでしょう。近代国民国家の原型が生じる中世は、人名や国名が多数出てくる複雑で捉えにくい時代であるがゆえに、枝葉を刈り取って単純化した単線的な物語は、少ないページ数でまとまりのある像を執筆しなければならない書き手にも、限られた時間で受験に必要な内容を教えこまねばならない高校教員にとっても、ある意味安心できる構成となっているのではないのでしょうか。

本稿では、このような一般的な高校世界史記述を念頭に置き、そこに近年のヨーロッパ中世

史研究の成果をどのように反映してゆくべきなのかについて、若干の考察を試みたいと思います。第1節では中世とされる時代を前後の時代を分かち時代区分を、第2節では中世という時代が置かれた舞台設定を、第3節ではグローバルヒストリーと中世ヨーロッパ研究の関係を論じます。

1 時代区分

先ほど確認しましたように、おおよその教科書における中世は、476年の西ローマ帝国の崩壊で始まり、1453年の百年戦争終結とビザンツ帝国（東ローマ帝国）の崩壊で幕を閉じます。率直に言えば、2つのローマ帝国の崩壊が中世の時代区分の指標となっています。これは一体何を意味するのでしょうか。幾つかの理解は可能かと思われませんが、わたしには、ギリシャの遺産を継承したローマ文明という「上位の」文明を、ルターに始まるプロテスタント勢力に鉄槌を下されるローマ・カトリックという腐敗したセクトと、古代世界が生み出した高度な文明を破壊し尽くすゲルマン人という野蛮な集団が駆逐する時代こそが「中世」である、と刷り込んでいるのではないかとすら思えてきます。冒頭に、近年の研究成果は「暗黒の中世」を「明るい中世」へと衣替えさせた」と記しましたが、その根本では、18世紀に執筆されたエドワード・ギボンによる『ローマ帝国衰亡史』のペシミスティックな亡霊がなお縛れているといえれば言い過ぎでしょうか。この2つの事件史的年号の含意する問題とその背後にある歴史理解の変化を考えてみましょう。

(1) 476年とゲルマン人

476年は、地中海世界西部を支配していた西ローマ帝国が北方のゲルマン人の侵入で崩壊し中世に移行するという際に持ち出される象徴的年号です。もちろん現状の教科書でも、このようなゲルマン人によるローマ帝国システムの一

方的破壊という理解は、高校世界史教科書レベルでも流石に後退し、西ローマ帝国の皇帝位の消滅と統治システムの崩壊は、ゲルマン人ら外的要因による外因説とローマ内部の問題の結果とする内因説の双方が考慮されるようになってきています。しかしながらここで問題としたいのは、ローマ人とゲルマン人という2つの民族集団の対立図式です。2つの問題を指摘しておきます。1つは、ゲルマン人という名称の問題です。わたしたちはゲルマン人という名称で、何か統一的な民族集団を想起してしまいがちですが、それはあくまで概念操作上の総称であるにすぎません。『ゲルマニア』で記述されるような各地に分立する小部族は、その後離合集散を繰り返し、部族特有の法慣習や起源神話などを共有することでフランク人やランゴバルド人といった大規模部族集団を形成します。もう1つは、こうした大規模部族集団がローマ帝国内各地にゲルマン人国家を建設する過程において、ローマ帝国が構築してきた多様な技術や文化を吸収している点です。彼らは長年ローマ帝国内に盤踞することで、政治儀礼、行政文書、コミュニケーション言語、都市機能などはローマから吸収し、自らに適合的な形で継承しています。そもそもゲルマン人国家といってもそこに組み込まれた在地ローマ人のほうが人口比率からいけば遥かに多いため、ゲルマン人がローマを塗り替えたという理解はかなりのニュアンスが伴います。もっともこれはローマとゲルマンの問題にとどまらず、ヴァイキングであれ十字軍国家であれ、進出先に根をはる諸集団と在地との関係全般に言えることではあります。

いずれにせよ476年の事件の背後には、ゲルマン人がローマ人を滅ぼしたという単純な図式ではなく、ローマ文明の諸要素を継承したゲルマン人集団が、時代の変化の中でその集団のエスニシティ構成を変えつつポスト・ローマ社会を構築してゆくという、古代末期という転換期における積極的かつ動態的な状況が想定されるのです。

(2) 1453年とルネサンス

1453年は、ヨーロッパ西部では百年戦争が終結し、東地中海ではビザンツ帝国（東ローマ帝国）が滅亡した年号です。なぜこのヨーロッパ東西で起こったこの2つの事件のあった年号を中世と近代（もしくは近世）の分水嶺とするのかということは興味深い問題ではありますが、さしあたりこの1453年が境目であることを受け入れたとしましょう。しかしここでひとつの問題が生じます。というのも、1453年を遥かに遡る14世紀におこったルネサンスという文化社会運動が、なぜか近代（近世）の出発点とされ、中世ではなく近代の章で記述されることがままあるからです。

教科書の理解では、イタリアにはじまるルネサンスは、ペトルカなどによる古典の再発見と俗語文化の開花によって特徴づけられています。しかしここで考えるべきは、政治史と社会経済史では14・15世紀という中世後期を混乱の時代として描写しておきながら、その14世紀におこっているイタリア・ルネサンスという文化現象のみをなぜ近代の序章として描くのかという点です。同時代に生じた現象であれば政治、社会経済、文化いずれも同時代の枠組みの中で論じるのが歴史的思考ですし、そうだとするならば、ルネサンスもまた、中世という舞台の中に位置づけるべき文化現象であるはずです。ダンテ、ボッカチオ、チョーサーら俗語文学の旗手の活躍を近代の先駆とし、極端な人口減を伴う黒死病、農村や都市で頻発する騒擾、ヨーロッパ全域での恒常的戦争状態といった負の要素を中世においやるのは、奇妙な分離と言わざるを得ません。

とりわけ近年の研究潮流では、14世紀から17世紀をひとつの連続する時代として理解することが多くなっています。それはつまり、イタリア・ルネサンスによる人文主義の知識によって、大航海時代による世界認識の拡大や宗教改革による信仰システムの刷新がおこり、

ヨーロッパ世界が変容していくという図式です。1453年をあくまで中世と近代の分水嶺とするのであればルネサンスもまた中世の現象として記述すべきですし、そうではなく、14世紀に始まるルネサンスを時代の区切れ目としたいのであれば、同時代の負の側面も近代で引き取るべきではないでしょうか。

2 舞台設定

ヘロドトスの叙述以来、歴史と地理は一体である、といわれてきました。歴史家は地理情報抜きで歴史を論じることはできませんし、地理学者も時代の変遷抜きで地形や景観の特徴や人間行動と地理的特性の関係を説明することはできません。時間と空間双方に配慮できて初めて、歴史を論じることができるのです。しかし、現状では、歴史家の地理感覚の欠如の度合いは進行しているようにも思われます。ここでは、中世ヨーロッパ史の舞台設定を再考する意味で、(1) ヨーロッパ半島と海域という地理的空間と(2) 2つのキリスト教世界という文化的空間を考えてみたいと思います。

(1) ヨーロッパ半島と海域

ヨーロッパというわたしたちはどうしてもその歴史の中で生み出されてきた文学、美術、建築、都市といったような文化生産物を想起してしまいます。しかし、地図の上のヨーロッパは、ウラル山脈より西の、ユーラシア大陸の西端を占める半島でしかありません。アルプス、ピレネー、スカンディナヴィアなどの峨々たる山脈から流れ出る多数の河川は、人々の生活を潤したのち海洋へと注ぎ込みます。このような地理環境に置かれたヨーロッパ人は常に海と向き合ってきましたし、とりわけ前近代においては、商業でも戦争でも日常生活でも海域をどのように利用するのが重要なイシューとなりました。ヨーロッパ半島はその周囲を海域で囲まれる地理空間であることをわたしたちは認識す

る必要があります。

古代世界は地中海を舞台に展開されました。そしてピレンヌの説に従って、その地中海から北ヨーロッパに諸現象の中心が移ることで中世的世界が誕生するという理解が長年なされてきました。しかしそれは1世紀近く以上も前のヨーロッパ史学とそれを継承した草創期の西洋中世研究が創りだした幻想に過ぎません。ブローデルの研究や近年の初期中世考古学が示すように、中世を通じて地中海の重要性は変化しませんでしたし、それと対置される北方の北海とバルト海も、ヴァイキングやハンザの舞台となったように、古代には見られなかった中世独自の重要な役割を担っていました。海域で直接暮らす人々の生活の糧を生産するという役割のみならず、とりわけ人やモノの移動に際して海域の持つ力は大きかったことは強調すべきであろうと思われまます。商人のみならず、海域に面した領地をもつ支配者は、その海域(島嶼や海峡を含む)をコントロールし、場合によってはシーレーンを支配しようと目論みました。

しかし、ヨーロッパを取り囲む海は、実のところ、地中海と北海・バルト海だけではありません。西に目を向ければ、北海・バルト海と地中海をつなぎ、15世紀には「新大陸」へと繋がることになる大西洋が広がり、東に目を転じれば、ビザンツ帝国、ロシア、遊牧世界、イスラームの結節点である黒海が開いています。この4つの大海だけではなく、北方に限ったとしても、アイスランドからグリーンランドをへてアメリカ大陸へと繋がる北大西洋、北方交易の重要な産品を産出する北極圏域、スカンディナヴィアとブリテン諸島の諸文化が混交するアイリッシュ海なども、中世ヨーロッパにとって不可欠の要素でした。アジア史では海域世界の重要性が認識されて久しく教科書にも積極的に採用されていますが、同様の認識はヨーロッパ半島史にも持ち込まれるべきでしょう。ヨーロッパ半島を構成する大陸とその周囲を圍繞する海域は、相互補完的に中世の歴史の舞台となって

いるのです。

(2) 2つのキリスト教世界

中世ヨーロッパはしばしばキリスト教の時代と言われる。しかし多くの教科書においては、ピピンの寄進、グレゴリウス改革、アナーニ事件といったローマ教皇にかかわる幾つかの事件とベネディクト会、クリュニー、シトー会、托鉢修道会という修道会の変遷に焦点をあてるのみで、キリスト教がどれほど中世社会と深く関わっていたのかという点はおろか、その基本的な文化地理構造についてすら説明することはありません。しかしこのキリスト教こそが、ヨーロッパ半島の歴史展開の諸要素を規定する主要因であるとすれば、散発的な事件の経過をたどるのではなく、その基本的な文化地理構造を説明しておくことは必要な作業と思われる。

ヨーロッパ半島には、大きく分けて、2つのキリスト教圏が成立します。それは、古代の5つの首都司教座のなかの1つであるローマが、教義や典礼という面で徐々に東地中海の4つの首都司教座（コンスタンティノーブル、アンティオキア、イェルサレム、アレクサンドリア）との差異を明確にし、首位権を主張するようになったことに端を発します。8世紀の聖画像論争、1054年のローマとコンスタンティノーブルの相互破門、1204年の第4回十字軍によるコンスタンティノーブルの破壊的行動などを通じて両圏域の分離は漸次的に進行しました。この2つのキリスト教圏とは、ローマを中心とし、ラテン語を公用語としたラテン・カトリック圏と、コンスタンティノーブルを中心とし、ギリシャ語を公用語としたギリシャ正教圏です。前者は、カール大帝によるフランク王国とブリテン諸島を中核とし、12世紀ごろまでには現在の東欧、北欧、南イタリア・シチリアが、その後十字軍運動を通じて、中東（一時的）、イベリア半島、バルト海周辺（最終的には14世紀のリトアニア大公改宗まで）がラテン・カトリック圏に組み込まれました。多方後者は、時

代とともに拡大また縮小するビザンツ帝国の領土とあわせて、ブルガリア、ルーマニア、そしてロシアを信仰共同体に組み込んでいます。この2つのキリスト教圏は、その圏域の隅々にまで張り巡らされた教会秩序構造によって圏域住民の生活様式や年中行事を規定し、中世人特有の宗教心とメンタリティをつちかうことになりました。

しかしこの両キリスト教圏に加えて、ギリシャ正教圏の外部に広がる東方諸教会とよばれる、ラテン・カトリックでもギリシャ正教でもない諸宗派を忘れるべきではありません。451年のカルケドン公会議で異端とされた単性論（イエス・キリストは単一の本性のみを持つ）やネストリウス派（イエス・キリストは神格と人格の双方を有する）は、三位一体を正当とする正統教会の支配が十分に及ばない東方世界へと移動しました。非カルケドン派とよばれる単性論派はシリア、アルメニア、コプト（エジプト）、エチオピア、インド（トマス派）に至るまで宗教コミュニティを形成しました。他方、ネストリウス派はササン朝で庇護を受け、そのササン朝の滅亡後は中央アジアや中国（景教）にもコミュニティを設けました。いずれも後代にまで続く組織をもつこれらセクトの広がり、古代末期から中世にかけてのキリスト教の多様性を証言する1つの要素でもあります。

3 グローバルヒストリーと中世ヨーロッパ

近年、グローバルヒストリーと称される歴史学的手法が、歴史学を席卷しています。元をたどれば、イマニュエル・ウォーラーステインが提唱したヨーロッパ中心の近代世界システム論に対する異論から生じた、近代世界におけるアジアの役割の見直しに端を発していますが、いまや、国境を超えた諸現象を扱う歴史分析であれば、猫も杓子もグローバルヒストリーと銘打っているようにも見えます。その内実については歴史学内でも多様な批判が有りますが、従

来の国民国家成立史という一国史を組み合わせた寄せ集めの世界史をより実質的な世界史とするためには、注目しておくべき潮流です。ここでは（１）越境する集団、（２）知識の転移、（３）ユーラシア世界と中世ヨーロッパという３つの観点から、グローバルヒストリーが中世ヨーロッパの歴史記述に与える影響を考えてみたいと思います。

（１）越境する集団

グローバルヒストリーが重視する要素の１つとして国家の枠組みを超えて移動する集団の存在があります。中世におけるもっとも顕著な事例としてヴァイキング（スカンディナヴィア人）とノルマン人を考えてみましょう。ヴァイキングは、スカンディナヴィアを故郷とし、およそ８世紀末から１１世紀半ばにかけて、船舶をもちいて北ヨーロッパのみならず地中海や北アメリカにまで拡大した集団です。彼らは、ヨーロッパ各地の宗教施設、都市、農村で略奪を行うとともに、毛皮や奴隷をあつかう商人として取引を行いました。それだけではありません。ヴァイキングは植民を行い現地の政治体と交渉し介入を試みる集団でもありました。イングランド北部にはデンローと呼ばれる入植地域を、フランス北部にはノルマンディー公領を、アイスランドには王なき政治体を、ロシアではノヴゴロド国やキエフ公国の成立に刺激を与えました。イングランド王国は１１世紀の初頭、スヴェン、クヌート、ハルサクヌートという３代に渡るデンマーク王に一時的に支配されました。またノルマンディーに定住したスカンディナヴィア系住民は現地住民と混交しながらノルマン人となり（ヴァイキング《スカンディナヴィア人》とノルマン人を同一視することがありますが、名実は別の民族集団と考えるべきです）、その後、イングランドを征服してノルマン朝を確立し、南イタリア・シチリアにシチリア王国を建設します。事ほど左様に、国境を超えた移動をおこなうヴァイキングとノルマン人

は、中世ヨーロッパ世界の政治秩序の形成に大きな役割を果たした、といえます。

もう１つの事例はユダヤ人です。ヴァイキングもそうでしたが、商人は、国家と国家の境界にこだわることなく、利益が生じるとわかれば軽々と越境します。世界史的に見ても、ソグド人やアルメニア人などは、ユーラシアに広く商業ネットワークを持つ存在でありました。中世ヨーロッパにおいてそのような役割を果たした集団の１つがユダヤ人です。通常の教科書では、ユダヤ人は、迫害対象となったキリスト教世界のマイノリティとしての役割が強調されます。しかしながら中世におけるユダヤ人は、ラビという宗教指導者をいただきヘブライ語を共通言語としながら各コミュニティをつなぐネットワークを都市間で形成していた、独自の文化を持つ民族集団でした。そして彼らはこのネットワークを利用し、キリスト教徒には禁忌事項の多い商業と金融業で活躍しました。キリスト教徒とは異なる商業ネットワークを、全ヨーロッパのみならずユーラシア世界にまで拡張していたユダヤ人は、また北ヨーロッパのハンザ商人やイタリアのジェノヴァやヴェネチアの商人が独自に形成する商業ネットワークと重なりながら、中世ヨーロッパ社会の中を、また中世ヨーロッパとその外部世界とを結びつけるルートを作り上げ、モノ・カネ・情報などを回転させていたのです。

（２）知識の転移

近年の教科書で１２世紀ルネサンスを取り上げないものはないでしょう。イタリアなどで古代ローマの法学文献などが再発見されるとともに、イベリア半島や南イタリアで、イスラーム世界に保存されていたアリストテレスら古代の学知が、アラビア語からラテン語に翻訳され、ヨーロッパの学知を根本的に進展させたという議論です。この記述自体は必ずしも間違いではありませんが、西ヨーロッパに都合の良い事実のみを切り取っています。

第一に、広く地中海世界に目を転じるならば、アラビア語圏でもシリア語圏でもギリシャ語圏（ビザンツ帝国）でも、アリストテレスに代表される古代の異教学知は保存され研究され続けていました。舞台をラテン・カトリック圏だけに限定すればたしかに12世紀ルネサンスは、スコラ思想の進展と大学の成立につながる革新的な知的運動かもしれませんが、古代学知の継承・研究・伝播というまさにグローバルヒストリーの対象となりうる越境的枠組みの中では、いちエピソードに過ぎません。第二に、12世紀ルネサンスでアラビア語などから翻訳された諸文献は、ルネサンスで再発見される「あるがまま」の古代文献ではありません。ギリシャ語からアラビア語、シリア語、ペルシャ語などに翻訳され、注釈され、当該言語圏での再解釈をへたものがラテン語に再翻訳されたのです。つまり、アリストテレスそのものではなく、重訳の過程で、アヴィケンナやアヴェロエスに代表されるアラビア語文化圏の知識を、ラテン・カトリック圏の知識人は吸収していることとなります。しかしそのアラビア語圏での知的成果、そしてキリスト教という文脈での再解釈を無視しているために、ラテン・カトリック圏という閉じられた世界で知識が復興しているかのような錯覚に陥っているのです。中世における知の先進地はコンスタンティノープルでありバグダードであったはずですが、現行教科書の12世紀ルネサンスの位置づけの背後にはなおユーロセントリズムが横たわっているのではないでしょう。

(3) ユーラシア世界と中世ヨーロッパ

前述したように、ヨーロッパ半島はユーラシア大陸の一部です。しかしながら、従来の研究では、ヨーロッパ半島が、それ以外の世界から切り離された独自の世界であるかのように語られてきました。せいぜい、大航海時代以降「世界の一体化」が起こったかのような錯覚を与えてきましたし、いまなお与え続けています。し

かしこれは率直に言うとおかしいと言わざるを得ません。ヨーロッパ半島は「世界の一体化」以前も、周囲の世界から孤立していたわけではありません。人・物・知識などの流通量や回転スピードなどに格差はあったとしても、アフロ・ユーラシア世界のなかに位置し、文化や信仰の異なる「他者」と交渉することで自らの姿を構築し続けていたのがヨーロッパであると考えべきです。

中世のキリスト教圏がもっとも頻繁に接触する「他者」は、イスラーム教徒でした。そもそも近年の研究では、ユダヤ教、キリスト教、イスラーム教という3つの中東一神教を、現代的な観点に従って別個の存在とするのではなく、旧約聖書を共通の宗教聖典とし、同一の根から派生した宗教セクトとして理解しようとしています。その後イスラームは、十字軍運動がそうであるように、キリスト教徒にとっては対立する他者集団として扱われることが多かったのですが、中世ヨーロッパの商業ルートはイスラーム世界のそれと接続することで互いに遠隔地産品を交換することになりましたし、十字軍のような直接接触を通じて知識や技術の伝播も行われました。イベリア半島、南イタリア・シチリア、十字軍国家が建設された中東など日常的にイスラームと接触する地域は独自の共生方法を考案していましたし、他方でイスラーム勢力との対峙は、君主らの外交政策やヨーロッパの文化活動に多様なニュアンスを与えることになりました。

仮にゲルマン人の移動が中世ヨーロッパの始まりだとするならば、その中世の開始とともに、ヨーロッパは中央アジアを出自とする遊牧諸民族と常に接触をはじめていました。アジアに面したビザンツ帝国は言うまでもなく、ラテン・カトリック圏も、5世紀以降、フン人、アヴァール人、マジャール人などとの対峙を余儀なくされました。彼らはヨーロッパでの戦闘、略奪、定住をくりかえし、マジャール人にいたってはパンノニア平原に国家（ハンガリー王

国)を形成し、ラテン・カトリック圏の一部となりました。

こうした遊牧民族の中でヨーロッパに最も大きな影響を残したのはモンゴル人でした。モンゴル帝国の台頭とそれに引き続くロシアや東欧の劫掠は、ヨーロッパ人のモンゴルに対する意識を決定しましたし、とりわけロシアにおいては、そのような「タタールのくびき」のなかで、モスクワ大公国の台頭が始まっています。しかしモンゴルの影響は以上にとどまりません。第一は、モンゴルの支配によって東西交通路の安全を保障した「モンゴルの平和」がユーラシア全域における商業の活性化を促し、ヨーロッパ人もまたこのなかに参加したことです。アプ＝ルゴドの『ヨーロッパ覇権以前』が描き出すように、ユーラシアの西端であるヨーロッパ半島も、ユーラシア交易システムの一部として、以前にもまして東西交易の活性化の恩恵を受けました。第二に、モンゴル世界を知るために、教皇庁やフランス王といったラテン・カトリック圏の最高権力体は托鉢修道会士らを派遣し、モンゴルに関する情報を収集しようとした。この作業は結果として、ヨーロッパにおけるユーラシア情報と他者認識の枠組みを拡大することになります。第三に、モノや情報の流れとともに、ヨーロッパのエコロジーシステムも変化させています。つまり、中世後期のヨーロッパの社会構造を激変させた14世紀の黒死病は、中央アジアから商業ルートを通じてヨーロッパに持ち込まれたものです。

近年ようやく教科書でも中央アジアの遊牧民族の歴史にある程度のページ数が割かれるようになりました。その遊牧民族の歴史は、ただただユーラシア東端の中国だけでなく、西端のヨーロッパ半島とも不可分であったと言えます。

このような遊牧民族の動向とヨーロッパ半島をリンクさせながら、グローバルヒストリーの対象となりうる越境的現象に着目することで、近代世界システム論による「世界の一体化」以前のヨーロッパを孤立から救い出すことが、今後必要になってくるのではないのでしょうか。

最後に

徐々に変化しているとはいえ、高校世界史教科書が、いまなお、著名人物・事件の結果・国家の盛衰による物語化を進めていることは否定出来ません。もちろんそこには、歴史はまずは人物や出来事といった具体的に想像できる対象から入ったほうが理解しやすいという高校生に対する教育上の配慮もあるでしょう。いきなり経済変動や宗教システムといった、フェーズをひとつあげた社会科学的枠組みを提示したとして、理解をしてもらえるところか、関心を持ってもらうことすら難しいかもしれません。したがって、わたしは個人や事件を高校世界史教科書から排除せよと申しているわけではありません。しかしながら、中世ヨーロッパ史の研究現場は刻一刻と変化しているにもかかわらず、高校世界史教科書がその変化を拒み続けた記述を採用し続けているとすれば、とりわけ高大連携が強調される今にあっては、不幸以外の何物でもありません。高校生が大学に進学して、大学の講義を受けた時、自分たちが学んできた世界史は何だったのかということにもなりかねません。研究者もまた、高校世界史教科書記述にどのように貢献できるのかを、現場の先生方とともに考えていかなければならないでしょう。

(世界史B新訂版執筆)